

『祖堂集』の構造

—法系図の作成とその分析—

柳 幹康

はじめに

拙論では『祖堂集』の記述に従って法系図を作成し、その構造について分析を加える。

『祖堂集』は、祖堂（祖師を祀る堂）に列せられた禪宗祖師の伝記・言葉の集録の意で、五代十国時代の南方福建（旧閩国、945年より南唐領）において952年（南唐保大10）に編まれた。もと1巻であったが、程なく10巻に増広されて「海東」こと朝鮮に伝わり、20巻に再編されて1245年（高宗32）に刊行された。ところが世から忘却され、20世紀初頭に韓国海印寺から版木が発見されるまでその存在を知る者はいなかった。従って後代への影響は殆ど無いが、後の大きな改変を免れていることから、当時の禪宗を知るための一級資料として広く注目されている（衣川 [2003 : 127] [2010 : 88–89] [2013 : 200–198] [2022 : 6, 74, 167–168]）。

『祖堂集』を扱った先行研究は非常に多く、それらは概ね以下の6種に分類できる。すなわち、（1）書誌研究、（2）校訂訳注研究、（3）拈弄研究、（4）歴史研究、（5）思想研究、（6）語法研究である（拙論 [2025a : 32]）。しかしながら管見の限り、同書所収の禅僧全員を網羅して法系図にまとめたものは無い。この作業は元来、一書全体の構造を見る上で最も基礎となるものである。それにも拘らず、これまで全体の法系図が作成されていなかった理由としては、次のような事情——従来の研究は各種史料の背後に潜む「史実」の解明に傾注しており、各史料をそれぞれ独立した一つの作品と看做し、そこに描かれる「歴史観」の総体を把握する視点を欠いていたこと——が挙げられるだろう⁽¹⁾。

『祖堂集』の構造

そこで拙論では以下、(1) 同書の記述——「相承^{そうじょう}」と「位次^{いじ}」——に従って全員を網羅する法系図を作成し、(2) その構造に分析を加える。

「相承」とは上の世代の法が下の世代の誰に伝えられたのかという縦の関係であり、「位次」は同一世代において複数の禅僧をどのような順番で録するのかという横の関係である。うち「位次」については基本的に、重要な禅僧ほど先に配される傾向にあり、とりわけ最初に挙げられる禅僧はその世代を代表する意味合いを有する。この「相承」と「位次」に基づくことで、燈史^{とうし}——法系（法の燈火を伝える系譜）を軸に歴代祖師の言行を収め禅宗の歴史を描き出す書⁽²⁾——ごとに特色ある法系図（伝法の系図）を復元することができる。以下に記す『祖堂集』の法系図は、今後の同書の研究において基本資料として長く参照されるものになると期待する。

1. 『祖堂集』の法系図

『祖堂集』が記す「相承」と「位次」に従い、そこに名に見える仏祖禅僧ら全259名を網羅する形で法系図を作成すると、末尾の図『『祖堂集』全体の法系図』のようになる（全4頁）。ただし過去7仏と達摩以前の27祖は繁を避けて一々名を挙げず、「過去7仏」「27祖」とまとめている⁽³⁾。

図に記した名前は原則『祖堂集』所録の法諱^{ほうぎ}（出家者としての本名）としたが、それが見えない者については同書の呼称を用いている。その名を記す際に、以下の通り表記を使い分けている。

1. 太字：独立の章を有する者246名⁽⁴⁾。その傍らに孫・衣川・西口[2007]が附す通し番号を記した。そのうち、朝鮮で増補された可能性の高い者8名⁽⁵⁾は、灰色で記した。

2. 細字：独立の章は有さないが、名と相承が記される者13名。その内訳は以下の通り⁽⁶⁾。

- ・[28] 達摩^{だるま}以下の1代2名（道育^{どういく}・総持^{そうじ}、S98）
- ・[39] 弘忍^{くわにん}以下の2代3名（神秀^{じんしゅう}・普寂^{ふじやく}・道明^{どうみょう}、S148）
- ・[41] 法融^{ほうゆう}以下の5代5名（智巖^{ちがん}・慧方^{えほう}・法持^{ほうじ}・智威^{ちい}・恵忠^{えちゅう}、S138）

- ・[50] 神会^{じんね}以下の3代3名（磁州^{じしゅう}如^{にょ}・惟忠^{いちゅう}・遂州^{すいしゅう}円^{えん}、S288）

「相承」を示す線は破線と実線の二種を使い分け、破線は傍系を、実線はそれ以外を意味する。『祖堂集』において傍系と示される部分には、以下の三個所がある。

- ・[28] 達摩下の道育・総持。本文部分には達摩の言葉として「三人の我が法を得たる有り。一人は我が髓を得、一人は我が骨を得、一人は我が肉を得たり。我が髓を得し者は恵可、我が骨を得し者は道育、我が肉を得し者は尼総持なり」とあり（S98）、髓を得た恵可よりも道育・総持が劣ることが明示されているため傍系とした。これは朝鮮で附された序文が二人を「初祖^{どうしん}傍出」とする理解とも合致する（S3）。
- ・[38] 道信の「下より横に一宗〈＝牛頭宗〉を出だす」とある（S91）。
- ・[39] 弘忍の下より「神秀和尚^{ろうあん}・老安〈＝慧安^{えあん}〉国師・道明和尚」を「傍出」とすると記される（S148）。

牛頭宗初祖の[41] 法融、および弘忍下の神秀・老安より下はそれぞれ実線とした。これは法融・神秀・老安から見てその下は傍系ではなく正系に当たることによる。

作図にあたり同書が記す「位次」に従い、各世代の禅僧を配した。世代ごとに上から下に見ていくと、傍らに附した数字（独立の章を有する者の通し番号）が昇順となっている通りである。師弟間で位次が逆転している（師の世代ではAの位次がBより高いのに対し、次の世代ではAの法嗣の位次がBの法嗣より低い）場合は、その「相承」を示す線が交差する形になっている。たとえば[91] 匡仁^{こうにん}の位次は[92] 居遁^{こどん}より高いが、匡仁の法嗣[145] 後疎山^{ごそざん}の位次は居遁の法嗣[144] 蔵嶼^{ぞうじょ}より低い。そのため[91] 匡仁と[145] 後疎山を結ぶ線と、[92] 居遁と[144] 蔵嶼を結ぶ線が交差している。なお細字の者は章を有さず「位次」が明示されないため、図では「相承」の線が複雑にならない形で適宜配置している。

- [57] 石頭希遷から[152] 誨機まで、位次が第一位の者の上に①～⑦の

番号を附した。これは [49] 青原行思・[56] 南岳懷讓下の世代数を示す。青原下何世という表現は『祖堂集』には無いが、便宜上附した。

『祖堂集』において「相承」が明示されない者に [191] 陳慧忠^{ちん え ちゅう}(7)、[244] 隱山^{いんざん}、[245] 興平^{こうへい}、[246] 米嶺^{べいりん}がいる。うち [191] 陳慧忠は同書が記す「位次」に従い、[190] 無了^{むりょう}と [192] 黒礪^{こくかん}の間に配した。ただし「九歳にして亀洋^{きやう}〈＝無了〉の庵に詣り出家す」とあるため、『祖堂集』は出家の師 [190] 無了に附随して録したことが分かる⁽⁸⁾。余他3名については図の右下に別記し、参考までに『景德伝燈録』に基づきその法系を名前の前に括弧で記した⁽⁹⁾。

それ以外の表記については、次節で述べる。

2. 分 析

法系図について、以下の6点を指摘することができる。

2-1. 自己認識：徳山一門

『祖堂集』の自己認識は「徳山一門」—— [74] 徳山宣鑑^{とくさん せんかん}(780-865)とその法を承ける人々——であった。図では当該する者全体を濃灰色の線で囲み、その背景を薄灰色にしている。この点については既に拙論 [2025a] で指摘しているが、『祖堂集』全体の構成を論じるうえでも重要であるため、本節で簡単に述べておきたい。

『祖堂集』が収録する最後の世代は青原下第7世であり、[152] 誨機^{かい き}から [162] 行崇^{ぎょうすう}までの計11名である。『祖堂集』の編者である静^{じやう}と筠^{いん}が [161] 省燈^{しやうとう}（文燈とも、892-972）の門下にいたこと、11名の法系を上に通つていくと皆 [74] 徳山宣鑑に行き着くことから、その自己認識は「徳山一門」であったと考えられる（拙論 [2025a : 44]）。

『祖堂集』はこれまで、雪峰^{せつぼう}下の燈史と記述されることが多かった⁽¹⁰⁾。もちろん編者の静・筠は [83] 雪峰義存^{ぎ せん}(822-908)の法嗣省燈の門下におり、この認識は誤りではない。だが厳密に言えば、彼ら一派の祖は雪峰義存ではなく、その師の [74] 徳山宣鑑とするべきである。なぜならもし、

彼らの祖が〔83〕雪峰義存であり、その師兄（兄弟子）の〔82〕嚴頭全藏（828-887）の一門と袂を分かったものと考えていたなら、その孫弟子の代まで〔82〕嚴頭全藏の門流を〔83〕雪峰義存の門流の上に置かなかったはずだからである（実際『景德伝燈録』では師兄の嚴頭全藏を雪峰義存の上に配するが、その孫弟子の代では自派に繋がる雪峰義存の法孫を首位に抛えている）。また『祖堂集』は〔66〕龍潭崇信（生没年不詳）の法嗣として〔74〕徳山宣鑑しか録していないことから、彼らの自己認識は、龍潭崇信ではなく徳山宣鑑の一門であったと見ることができる⁽¹¹⁾。

徳山の法嗣である〔82〕嚴頭全藏・〔83〕雪峰義存の師兄弟、およびその法嗣・法孫らは、福建という地縁でも結ばれていた。嚴頭全藏・雪峰義存はともに福建の出身であり、雪峰義存を外護した王審知（在位909-925）は福建を領土とする閩国の初代王であった。嚴頭全藏は湖北に住したものの⁽¹²⁾、雪峰義存が住した雪峰山（象骨巖とも）は福建にあり、両者の法嗣・法孫も福建と縁のある者が多い。すなわち、『祖堂集』の記録によれば、

- ・嚴頭の法嗣全4名のうち3名が福建出身で、そのうち1名が福建に住し⁽¹³⁾、
- ・嚴頭の法孫全4名のうち2名が福建出身であり⁽¹⁴⁾、
- ・雪峰の法嗣全21名のうち13名が福建出身で12名（うち9名が福建出身）が福建に住し⁽¹⁵⁾、
- ・雪峰の法孫全7名のうち5名が福建出身で5名（うち3名が福建出身）が福建に住している⁽¹⁶⁾。

注目すべきが嚴頭の法嗣〔113〕道閑である。彼は福建の出身で、嚴頭に嗣法した後に王審知に招かれて福建の羅山に住し（賈〔2010：360〕）、その章は嚴頭の法嗣のなかで最も長く、かつ『祖堂集』が録する嚴頭の法孫全4名のうち3名が道閑の法嗣となっている。このことから道閑が福建にあって嚴頭・雪峰の両系を繋ぐ重要な存在であったことが窺える。

ただし徳山門下の中心人物はあくまで雪峰義存であり、彼により1700人という当時最大の教団が築かれたことを『祖堂集』は特記している（拙論〔2025a:37〕）。そこで図では雪峰義存を黒の四角で囲み、背景を白色とした。

2-2. 位次（1）：雪峰が参じた投子と洞山

青原下第4世の位次を見た際に、最初の4名が〔74〕徳山宣鑑、〔75〕とうす だいどう投子大同（819-914）、〔77〕しんざん そうみつ神山僧密（生没年不詳）、〔78〕洞山良价（807-869）となっている。これは、雪峰の行脚の経歴を反映している可能性が高い（〔76〕そうどう けいほう しゅうみつ草堂（圭峰）宗密（780-841）は青原下ではないため今は外し、次節で詳しく論じる）。

『祖堂集』にはその記載は無いが、『景德伝燈録』には「雪峰和尚、三廻みたび投子に到り、九度洞山に上る」と記されている（K26.n/772、鈴木〔2009：52〕）。つまり雪峰は最終的に〔74〕徳山に嗣法したが、〔75〕投子と〔78〕洞山の二人とも縁が深かったのである。このことを記録しない『祖堂集』においても、この二人の位次が高くなっているのは、その編者にも同様の理解があったからであろう。なお〔78〕洞山の上位に〔77〕神山が配されているのは、彼が洞山の師兄であることに鑑みれば怪しむに足りない⁽¹⁷⁾。図ではこの〔75〕投子大同と〔78〕洞山良价の二人を破線で囲み、背景を薄灰色とした。

2-3. 位次（2）：神会下の宗密と洞山下の雲居

青原下ではない〔76〕草堂宗密を、青原下の〔75〕投子大同と〔77〕神山僧密の間に割り込ませているのは、〔78〕洞山良价とその法嗣に対する徳山一門の（a）評価と（b）緊張感を反映している可能性が高い。

（a）徳山一門の〔78〕洞山良价に対する評価は低いものであった。徳山の法嗣において最高の位次にある〔82〕巖頭全歳は、かつて洞山良价のもとに「三十年」もいたが、その力量を認めず、以下のように評したという、「洞山、好個よき仏なるも、只ただ是れ光無き奴なり」（S337、小川〔2011：138〕、土屋〔2024：37〕）。これはもとより巖頭全歳個人の言葉であるが、『祖堂集』の自己認識が徳山一門であり、その法嗣の首位に巖頭全歳を配していることに鑑みれば、これが彼らの共通理解であったと言えるだろう。一方、〔75〕投子大同に対する低い評価は見当たらない。

（b）洞山良价の法嗣〔84〕うんご どうよう雲居道膺（830-902）は、徳山宣鑑の法を嗣ぐ雪峰義存にとってライバル的存在であった。そもそも徳山宣鑑が世に出た

のは洞山良价の約10年後のことであり（注(11)参照）、徳山一門は洞山一門の後塵を拝する存在であった。両教団の次世代を担う雲居道膺と雪峰義存（822-908）は8歳しか離れておらず、ともに青原下5世であり、それぞれ1000人、1700人という大規模の教団を擁するとともに（拙論 [2025a : 34]）、互いにその存在を意識していた⁽¹⁸⁾。一方、[75] 投子大同の法嗣は『祖堂集』には収録されていない。つまり徳山一門にとって [75] 投子大同は単なる過去の敬うべき禅僧であるのに対し、洞山一門は脅威となる同時代の存在だったのである。

このような (b) 洞山一門に対する緊張感と、(a) その祖洞山良价に対する低い評価とに基づき、かつて雪峰義存が参じた [75] 投子大同と [78] 洞山良价のふたりを上位と下位に配し、さらにその懸隔を強調するために、全く法系の異なる [76] 草堂宗密をその間に割り込ませたのであろう。『祖堂集』において草堂宗密に対する評価は見当たらないが、その4代前の [50] 荷沢神会^{かたくじんね}は、その世代の首位を占める [49] 靖居^{せいきよ}（青原^{ぎょうし}）行思にやり込められたという話が録されている⁽¹⁹⁾。つまり洞山一門は、徳山一門同様、青原の系譜に列なっているが、その実、青原にやり込められた神会の門流よりも下だと言いたいのであろう。

図では雪峰にとってライバルであった [84] 雲居道膺を実線の四角で囲み、背景を灰色としている。また [76] 草堂宗密と、その4代前の [50] 荷沢神会、および後者の上位にある [49] 靖居行思を破線の四角で囲んだ。

2-4. 位次 (3) : 雪峰のライバル趙州

雪峰にとってもうひとりのライバルであった [220] 趙州^{じょうしゅうぜんしん}全諗⁽²⁰⁾についても、『祖堂集』は別段敬意を払っていない。図では先の雲居同様、実線の四角で囲むとともに、背景を灰色にしている。

拙論 [2025a : 44-45] でも述べた通り趙州は、傑出した禅僧であり、その名声は雪峰のもとにも届いていた。雪峰に参じた修行僧が趙州の話をとりあげ問答したほか⁽²¹⁾、雪峰に対する趙州の鋭い批判をめぐり雪峰門下で問答もなされており⁽²²⁾、更には「南に雪峰有り、北に趙州有り」という雲居の言葉も録されている⁽²³⁾。ところが趙州の位次は、当該世代（青

『祖堂集』の構造

原・南岳下3世) 全35名のうち第33位、その師 [195] 南泉普願^{なんせん ふがん}の法嗣全7名のうち第5位と、かなり低くなっている。つまり『祖堂集』は位次の点で、趙州に対し何ら敬意を払っていないと言える。

2-5. 位次(4): 師弟間の逆転の有無

『祖堂集』において徳山一門の禅僧は整然と配されているのに対し、それ以外の部分では師弟間での位次の逆転——上の世代ではA、Bの順になっているのに対し、下の世代ではBの法嗣、Aの法嗣の順になっている例——が以下の通りま見られる。

・[63] 薬山惟儼下

- ・[69] 徳誠^{とくじょう}の位次は [71] 円智^{えんち}より高いが、徳誠の法嗣 [81] 善会^{ぜんかい}の位次は、円智の法嗣 [79-80] 仲興^{ちゅうこう}・慶諸^{けいしよ}より低い。
- ・[80] 慶諸^{けいしよ}の位次は [81] 善会^{ぜんかい}より高いが、慶諸の法嗣 [101-109] 懷祐^{えいゆう}～宝蓋^{ぼうがい}の位次は、善会の法嗣 [94-100] 令超^{れいちよう}～寰普^{かんぷ}より低い。
- ・[91] 匡仁^{くわいじん}の位次は [92] 居遁^{ことん}より高いが、匡仁の法嗣 [145] 後疎山^{こうそさん}は、居遁の法嗣 [144] 蔵嶼^{ざういつ}より低い。

・[163] 馬祖道一下

- ・[174] 懷暉^{わいけい}の位次は [175] 智藏^{ちざう}より高いが、懷暉の法嗣 [207-208] 玄昱^{げんいつく}・公幾^{こうき}の位次は、智藏の法嗣 [203-206] 処微^{しよび}～洪直^{こうちよく}より低い。
- ・師の世代では [178] 宝積^{ほうしゃく}・[179] 宝徹^{ほうてつ}・[180] 齊安^{さいあん}の順に挙げられるが、法嗣の世代では齊安の法嗣 [209-210] 道常^{どうじよう}・梵日^{ぼんにち}、宝積の法嗣 [211] 普化^{ふけ}、宝徹の法嗣 [212] 無染^{むぜん}の順となっている。
- ・[181] 靈嘿^{れいもく}の位次は [182] 法常^{ほうじよう}より高いが、靈嘿の法嗣 [214] 正原^{しょうげん}の位次は、法常の法嗣 [213] 天龍^{てんりゅう}より低い。

つまり『祖堂集』は、自派の配列には注意を払っていたのに対し、それ

以外の配列についてはそこまで厳密ではなかったのである。

2-6. 朝鮮における増補と当初の構成

朝鮮においてどの程度の増補がなされたかについて、研究者の間で意見が分かれているが（注(5)参照）、その如何に関わらず、『祖堂集』全体の構成には改変が加えられていなかったと言える。

朝鮮で増補された可能性の高い禅僧 8 名は前述の如く、法系図において灰色で示している。その全ては馬祖道一であり、彼らに繋がる禅僧を見ると、馬祖道一の世代においても、その法嗣の世代においても位次が低い。その名前と位次を列挙すると以下の通り。

- ・[163] 馬祖道一、3 位⁽²⁴⁾。
- ・馬祖道一の法嗣のうち、増補された可能性の高い禅僧につながる者は以下の 6 名。
 - ・[171] ひやくじょう え かい 百丈懷海、15 位。
 - ・[174] しやうけい え き 章敬懷暉、18 位。
 - ・[175] さいどう ち ぞう 西堂智蔵、19 位。
 - ・[179] ま よくほうてつ 麻谷宝徹、23 位。
 - ・[180] えんかんさいあん 塩官齊安、24 位。
 - ・[195] なんせん ふ がん 南泉普願、38/39 位⁽²⁵⁾。

拙論では、朝鮮での増補の有無・多寡の如何に関わらず、現行の『祖堂集』はもとの構成——編者静・筠が帰属する徳山一門を上位に抛える構造——を留めていると推定する⁽²⁶⁾。その理由は以下の 3 点に整理できる。

第一、増補があった場合、その可能性の高い 8 名はみな馬祖下である。もし増補時に全体の構成を改めたのであれば、馬祖道一の位次が第 1 位となっているはずだが、実際にはそうならない。馬祖下の禅僧を増補した者にとって重要なのは馬祖門下であり、徳山一門を上位に抛える必要はなかったであろうから、現在の構成は徳山一門の手で編まれた当初の形を留めていると言える。

『祖堂集』の構造

第二、これまで増補の可能性が指摘された者は、上記8名のほかに、以下の2種12名がいる（下記のアルファベットは注(5)に従う）。

(a) 朝鮮僧2名。雪峰義存に嗣法した後、中国の寺院に住持。その記録が中国に残る。

(d) 中国僧10名。馬祖道一に嗣法し、中国に記録が残る。

注(5)に記した通り、拙論では上記12名の増補の可能性は低いと判断し、候補から除外していた。だが仮に彼らがみな朝鮮での増補であったとしても、現行の『祖堂集』の構成が朝鮮伝来以前の原型を留めているという拙論の主張は揺るがない。なぜなら、(d)についてはみな馬祖下であるため、先の第一の場合と同様であり、(a)の2名は徳山一門で位次が低く（[128] 靈照は19位、[130] 玄訥は21位）、彼らのために徳山一門全体の構成を改めたとはいえられないからである。もしそうしたのであれば、この2人は上位に引き上げられていたはずだが、実際にはそうっていない。

第三、増補が無かったのであれば、もとより現行の『祖堂集』は当初の構成を保っていることになる。

3. まとめ

拙論では『祖堂集』が記す「相承」「位次」に従い、同書に録される仏祖禅僧ら全259名を法系図にまとめた。うち独立の章を有する者は246名、名前のみ見える者は13名である。

この法系図は『祖堂集』全体の構成を可視化したものであり、それに基づき以下の6点を指摘した。(1)『祖堂集』の自己認識は「徳山一門」にあり、そのなかで1700人にも及ぶ史上最大の教団を築いたのが雪峰義存であった。(2)雪峰の師の世代である青原下第4世は、徳山宣鑑・投子大同・神山僧密・洞山良价の順となっている。これは雪峰の師である徳山を首位とし、その下に雪峰が何度も参じた投子と洞山を配し、かつ洞山の上位にその師兄である神山を扱えたものと見られる⁽²⁷⁾。(3)うち投子と

「神山・洞山」の師兄弟の間に青原下ではない草堂（圭峰）宗密を割り込ませている。これは洞山門下に対する徳山門下の見方——洞山の力量を認めず、かつその法嗣の雲居をライバル視していたこと——を反映している可能性が高い。（４）雪峰にとってもうひとりのライバル趙州全諗（從諗）について、その位次はかなり低くなっており、この点で『祖堂集』の編者が特に敬意を払っていなかったことが分かる。（５）同書において師弟間における位次の逆転がまま見られるのに対し、徳山一門の禅僧はそれが無く整然と配されている。これは同書が自派の位次に細心の注意を払っていたことを示している。（６）全体の構成は旧閩国領内の徳山一門の手で編纂された当初の姿を保っており、朝鮮で馬祖下の禅僧が増補されたとしても全体の構成そのものは改変なく踏襲された。

これまで「相承」「位次」に基づく全体の法系図の作成は行われてこなかったが、そこにこそ燈史（禅宗史書）の歴史観——自他をどのように分け禅宗の流れ全体をどう捉えるか——が色濃く反映しているのである。

*本研究はJSPS 科研費（JP21K00060）の助成を受けている。拙論の執筆にあたり馬場紀寿氏と Van Cutsem, Laurent 氏から数多くの貴重なご助言をいただくとともに、小林遼太郎氏には法系図と引用文の確認作業をしていただいた。また2025年7月からは一般財団法人普回向（代表理事、越村吉隆氏）より禅宗研究に対しご支援をいただいている。各位に心より感謝申し上げる。

注

- （１）『祖堂集』の訳注・解説に際し法系図が作られることはあったが、そこに記される全員を網羅したものではなく、かつ同書の記す「位次」にも注意を払っていない（柳田 [1984: 296] [1985: 260] [1990: 485]）。近年 Van Cutsem [2023: 234-243] は『祖堂集』所収の禅僧全員について、Gephi (The Open Graph Viz Platform) を用い図示しているが、一見して明らかな通りそれは主要な禅僧を中心に、その周辺に弟子を配する形となっており、同書が記す「位次」を反映させる拙論の作図とは目的が異なる。

また拙論 [2025a: 34] において、『祖堂集』の「相承」と「位次」に従い法系図を作成したが、そこで挙げたのは同書の歴史観の概略を示

すのに必要な89名に過ぎない（便宜的に附した編者2名、および「他2名」と附記した者は除外）。それに対し今回は、『祖堂集』に名が見える全259名を法系図に収めること、およびその全体に分析を加えることを目的としている。一部の例外——同書の帰属意識が「徳山一門」であること、そのなかで雪峰門下が隆盛を極めたと認識されていたことの指摘——を除き、議論も重複していない。例外的に重複する箇所については既発表の拙論に言及する形で、そのことを示している。

なお『祖堂集』を独立した一つの作品と看做し、その「作品世界を『祖堂集』の記すままに読み取ってゆ」く手法は小川〔2011：102〕が初めて用いたもので、そこから啓発を受けた。ただし小川の分析対象は「石頭は是れ真金舗、江西〔馬祖〕は是れ雜貨舗」という有名な句が含意する馬祖・石頭両系統の思想的相違であるのに対し、拙論ではそこに収録される禅僧全員を法系図に整理することを目的としている。また馬場〔2008：11〕〔2017：2〕がスリランカの仏教史書研究に導入した構造的な分析——編纂者の「編集作業」に注意しながら「文献内在的に読み、その構造を明」かすことで、「編纂者の視点」を読み解く手法——からも啓発を得ている。

- (2) 燈史について柳田〔1967：11〕は「達磨系の禅の師資相承の系譜を中心とし、歴代の祖師たちの機縁問答や上堂示衆などを収録したもの」と述べ、齋藤〔2020：9〕は「達磨を祖師と奉ずる禅宗において仏法伝授の系譜をなす祖師たちの言行を記した書」と定義している。拙文では両説を承けつつ、やや表現を変えて「法系（法の燈火を伝える系譜）を軸に歴代祖師の言行を収録し禅宗の歴史を描き出す書」を「燈史」と定義する。表現を改めた理由は、次の二つ——（1）一書を構成する軸が法系であることを明示するため、（2）定義に「燈」と「史」の二字を入れるため——である。「燈史」の具体例としては、今回扱う『祖堂集』、および拙論〔2025b〕で扱った五燈・『五燈会元』などが挙げられる。
- (3) 「過去7仏」「27祖」と略記した部分について、その詳細を示すと以下の通りである。「過去7仏」は〔1〕毘婆尸仏、〔2〕尸棄仏、〔3〕毘舍浮仏、〔4〕拘留孫仏、〔5〕拘那含牟尼仏、〔6〕迦葉仏、〔7〕釈迦牟尼仏。「27祖」は〔8〕大迦葉、〔9〕阿難、〔10〕商那和修、〔11〕優婆鞠多、〔12〕提多迦、〔13〕弥遮迦、〔14〕婆須密、〔15〕仏陀難提、〔16〕伏駄密多、〔17〕脅、〔18〕富那耶奢、〔19〕馬鳴、〔20〕毘羅、〔21〕龍樹、〔22〕迦那提婆、〔23〕羅睺羅、〔24〕僧伽難提、〔25〕伽耶舍多、〔26〕鳩摩羅多、〔27〕闍夜多、〔28〕婆修盤頭、〔29〕摩拏羅、

[30] 鶴勒^{かくろく}、[31] 師子^{しし}、[32] 婆舍斯多^{ばしゃした}、[33] 不如密多^{ふにみだ}、[34] 般若多羅^{はんによた}。

- (4) 単独の章を有する246名のうち最後の [246] 米嶺^{べいれい}のみ、原本で改行されず、基本的な伝記も録されていない。Van Cutsem [2023 : 239]。
- (5) 朝鮮における増補について、様々な説が提示されており、未だ一致を見していない。諸説を整理するにあたり、増補の可能性について言及された者を下記の通り (a)～(d) の4種に分けて記す。拙論ではそのうち (b+c) 8名について、増補の可能性が高いと判断する。なお拙論では、朝鮮半島という地域を示す語として「朝鮮」の二字を用いている。なぜなら当時は新羅 (前57-後935) から高麗 (918-1392) への移行期であり、二国^二の名を用いると論述が煩瑣になるからである。

- (a) 雪峰義存に嗣法した朝鮮僧2名 : [128] 靈照^{れいしやう}、[130] 玄訥^{げんとつ}。
- (b) 馬祖道一の法孫にあたる朝鮮僧で、「九山」(後述)の祖とされる7名 : [204] 道義^{どうぎ}、[205] 慧徹^{えてつ}、[206] 洪直^{こうちよく}、[207] 玄昱^{げんいつ}、[210] 梵日^{ぼんにち}、[212] 無染^{むぜん}、[219] 道允^{どういん}。
- (c) 仰山^{きやうざん}慧寂^{えじやく}に嗣法した朝鮮僧1名 : [238] 順之^{じゆんし}。
- (d) 『祖堂集』の最後に配される馬祖下の中国僧8名 : [239] 米^{べい}、[240] 宝寿沼^{ほうじゆしやう}、[241] 志閑^{し かん}、[242] 存獎^{そんしやう}、[243] 後魯祖^{ごろそ}、[244] 隱山^{いんざん}、[245] 興平^{かうびやう}、[246] 米嶺^{べいれい}。

増補の可能性について最初に論じたのは椎名 [1979] であり、(b) と (c) を朝鮮での増補と推測した。その理由は以下の通り。(b) は「九山」(9世紀から10世紀前半にかけて成立した朝鮮仏教の九つの主要な門流)の祖とされる禅僧であり、かつ『祖堂集』の半世紀ほど後に中国で編まれた『景德伝燈録』には名が記されるのみで、伝を欠く。(c) は『祖堂集』において、西天初祖の [8] 大迦葉に喩えられるなど非常に重視された朝鮮僧であり、その章は単独で巻20の5分の4を占めるように「異例の紙幅を構成」する。したがって、いずれも増補の可能性がある。

この (b+c) 8名を朝鮮での増補とする説は、衣川 [2003 : 144-148]、Anderl [2004 : vol.1 30-32] により採用され、それを補強する根拠も提示された。ただし衣川は後、それに加えて (d) も朝鮮での増補と見たが、その理由は記していない (衣川 [2022 : 90, 168])。

また近年 Van Cutsem [2023 : 121-122] は (a+b) 10名——これは『祖堂集』が録する朝鮮出身の僧全てに当たる——について、朝鮮で増補されたことを証明する確固たる根拠は存在せず、朝鮮での増補人数は

0～10のうちの全ての可能性がある」と論じている。

なお極端な例として、梁 [2000 : 57] は全体の 9 割を後代の増補とする。だがこれは衣川 [2003 : 151]、Anderl [2004 : vol.1 32-39] が指摘するように、曲解に過ぎず、採用することはできない。

拙論では椎名 [1979] が示し、衣川 [2003 : 144-148]、Anderl [2004 : vol.1 30-32] が補強した理由に基づき、(b+c) の 8 名を朝鮮で増補された可能性が高いと見る。(a) は夙に椎名 [1979 : 71] が「中国の寺院に住した高德で、『伝燈録』〈＝『景德伝燈録』〉にも見録され」ており、『祖堂集』のみが特別に扱うわけではない」ため、増補の可能性は低いと判断する。(d) については理由が示されておらず、もとより中国の禅僧であり、朝鮮での増補を疑うに及ばないと判断し、そのリストから外す。

ただし Jorgensen [2005 : 740] が述べる通り、確固たる証拠が無いため畢竟何名であったかは確定できない。またその人数の多寡、および増補の有無の如何に関わらず、本論部分で述べる結論——現行の『祖堂集』は南方福建で編纂された当初の構造を保存しているという推定——は変化しない。

なお拙論 [2025a : 33-34] では衣川 [2022 : 90, 168] を承けて (b+c+d) 16 名を朝鮮での増補と見たが、ここでそれを (b+c) 8 名に修正する。ただし既に「今回除外する 16 名を加えても拙論の結論に変化は生じない」と述べていた通り、この修正を加えても同論の結論に変化は生じない。

加えて一点、朝鮮における増補の有無によりその意味づけが異なる興味深い記述について指摘しておきたい。(b) 馬祖道一の法孫にあたる朝鮮僧 7 名のうち以下 3 名の章には、その法が朝鮮に帰したと記されている。第一が [204] 道義であり、馬祖すべの法嗣 [171] 百丈懷海は彼に対し「江西〈＝馬祖〉の禅脈、総て東国〈＝朝鮮〉の僧に属さん歟」と述べたという (S750)。第二が [212] 無染であり、馬祖すべはその当来を予見して「若し東人の目撃みす可き者を得ば、菓を道中に駄れ、慧水ひみをして丕おいに海隅かいぐう〈＝朝鮮〉を冒おわしめよ。徳を為おすこと浅ひきに非じ」と法嗣 [179] 麻谷宝徹に述べ、宝徹は無染に「禅侯ぜんこうを東土〈＝朝鮮〉に冠わたらしめよ」と告げたという (S762)。第三が [219] 道允みちのりであり、馬祖の法嗣 [195] 南泉普願は彼に対し「吾が宗の法印わ、東国〈＝朝鮮〉に帰せ矣」と述べたという (S782)。先述の通り以上 3 名の章はいずれも朝鮮で増補された可能性が高い。本当に朝鮮での増補であるなら、その背

後にあるのは「馬祖の法が伝わったことで仏教の中心は中国から我が朝鮮へと移った」という朝鮮僧の自負心ということになる（衣川 [2003 : 145] [59-60, 345]）。それに対し（その可能性は低いと考えるが）、もし中国で編纂された当初よりこのように記されていたのであれば、それは「馬祖の法は既に朝鮮に伝わり中国では廃れ、今や我ら徳山一門こそが中国仏教界を席卷している」という編者の自負心の現れということになる。『祖堂集』の編者の自己認識が徳山一門であることは、本文2-1で論じている。

- (6) 柳田 [1964 : 47]、Van Cutsem [2023 : 130]。
- (7) [191] 陳慧忠は [50] 慧忠と区別するため、俗姓の「陳」を冠した。
- (8) 『祖堂集』は [163] 馬祖道一の法嗣として [190] 無了を、それに続き [191] 陳慧忠を挙げるが、実際にはいずれも馬祖の法嗣ではない。[190] 無了 (787-867) は馬祖 (709-788) の示寂時、わずか2歳に過ぎなかった。無了が馬祖に嗣法したとする説は、黄滔 (840-911) が撰述した無了の碑文に初めて見えるもので、『祖堂集』はこれを採用したのである（賈 [2010 : 76-77]）。[191] 陳慧忠 (817-882) が生まれたのは馬祖の寂後である（賈 [2010 : 77]）。
- (9) 『景德伝燈録』において [244] 隠山は「馬祖法嗣」として立てられた「潭州龍山和尚」の章に「亦た隠山とも云う」と注記されている（K8.n/190）。[245] 興平は「馬祖法嗣」として「京兆興平和尚」の章が立てられている（K8.n/188）。[246] 米嶺は「馬祖法嗣」として「米嶺和尚」の章が立てられている（K8.n/180）。柳田 [1964 : 45-46]、孫・衣川・西口 [2007 : 序9]、張 [2009 : 12]。
- (10) 柳田 [1984 : 1585] は『祖堂集』の編者静・筠が当時師事していた省僊について「雪峰下3世の孫」と述べ、「『祖堂集』は、そんなこの地（＝比較的平穏で経済力の向上した閩越）の雪峰下の弟子たちの、盛んな活動を背景として成立」したと記す。楊 [1995 : 595] も静・筠について雪峰の法系に属すると述べ、衣川 [2022 : 360] も『祖堂集』の「編纂者が雪峰門下である」と記している。
- (11) 『景德伝燈録』は龍潭崇信の法嗣として徳山宣鑑のほか「洪山泐潭宝峰和尚」を挙げている（K15.2/381）。もし『祖堂集』の自己認識が「龍潭一門」であったなら、同様にその名を挙げていたことであろう。
なお「[40] 第33祖恵能― [49] 青原行思― [57] 石頭希遷― [59] 天皇道悟― [66] 龍潭崇信」の法系を最初に掲げたのは、徳山一門であったと推定されている（賈 [2010 : 266]）。賛寧 (919-1001) が当時

の碑文など各種資料を渉獵して編んだ『宋高僧伝』(988年)では、「唐荊州天皇寺道悟伝」を立て、以下のように記している——天皇道悟は「径山国一（＝道欽）禪師に投じて「足を礼し始めて畢おわるや密かに宗要を受あけ、「服勤すること五載にして随いつせいて亦た印可たま」された。その後、「道塗あやまりの乖錯ごうさく」があるのではないかと疑い「重ねて諮訪たずぬること有り」、「建中の初め〈780年〉鍾陵しゅうりょうの馬大師（＝馬祖道一）を詣たずね、二年〈781年〉秋、石頭上士（＝石頭希遷）を謁たずね、「凡そ三たび哲匠ていしやうに遇あ」つたのであった。その弟子に「龍潭禪院釈崇信」がおり、「後ち徳山鑑師、其の門より出で、宗風、大いに盛んとな」つた——（巻10：T50.769a-770a、賈 [2010：65]）。つまり『宋高僧伝』（とそれが参照したであろう碑文）によれば、天皇道悟が印可を得たのは径山国一（『祖堂集』の[43]道欽）からであつて、その後に[163]馬祖道一と[57]石頭希遷にも参じて、その悟境に誤りなきことを確認したのである。それに対し同じく『宋高僧伝』が立てる「唐朗州徳山院宣鑑伝」には、「石頭宗師（＝石頭希遷）の二葉（＝二世）」である「龍潭信禪師に造り、「機、教かみと符あひ」つたとある（巻12：同778b-c）。つまり『宋高僧伝』が参照したであろう[74]徳山宣鑑の碑文には、彼が[57]石頭希遷の法孫である[66]龍潭崇信に嗣法したと明記されていたことになる。なお『宋高僧伝』の編者贊寧と同時期に、同じ呉越国内には徳山下5世の天台徳韶（＝徳韶）とその門下が活躍しており、彼らもまた徳山は龍潭に嗣法したと認識していた。天台徳韶の法嗣道原は龍潭の法嗣として徳山の言行を『景德伝燈録』に収めている（K25.n/717）。

法系に関し、かかる変遷——「径山道欽—天皇道悟」から「石頭希遷—天皇道悟」への移行——が生じた経緯は、以下のようなものであったと推測する。

- i. 天皇道悟（748-807）の碑文が撰された頃、径山道欽・馬祖道一・石頭希遷はみな「哲匠」と認識されていた。しかしながらこの三名の当初の知名度には相違があった。その概略は以下の通り。
 - ・径山道欽（715-793）は生前768年に都に召され皇帝代宗（在位762-779）より「国一こくいち禪師」の号を賜っており（T50.764c）、早くより名声が鳴り響いていた。
 - ・馬祖道一（709-788）も生前から有名で、門下より著名な禅僧を輩出し（賈 [2010：49]）、うち鵝湖大義（746-818）が貞元年間（785-805）に、章敬懷暉（＝章敬）（756-816）が808年に、興善惟寛（＝興善）（755-817）が809年にそれぞれ入内し、その宣揚により「惠能—南岳

懷讓一馬祖道一」の法系が知られるようになった (T50.761b、賈 [2010 : 249-252]、小川 [2016 : 146-147])。馬祖自身も元和 3-12年 (808-817) に大寂禪師と追諡された (賈 [2010 : 48])。

- ・石頭希遷 (700-790) は馬祖下で編まれた『宝林伝』(801年) に立伝されており一定の知名度はあったが (椎名 [1980 : 193])、その門流は独立した一派として認識されていなかった (賈 [2010 : 262])。石頭希遷の寂後30年以上たった長慶年間 (821-824) に門人道銑が文人劉軻に頼み、碑文に以下のように書いてもらった。「江西は大寂く＝馬祖道一を主とし、湖南は石頭く＝石頭希遷を主として自り、往来憧憧、二大士く＝馬祖・石頭に見えずんば無知と為せ矣」(T50.764a)。これはあくまでその没後30年後の門人の認識を投影した記述であり、当時その知名度は馬祖に及ばなかった。その後に石頭希遷の名を挙げる早い例は、838年以降の執筆と見られる圭峰宗密 (780-841) の『禪源諸詮集都序』であり、劉軻の撰文から14年以上後のことである。無際大師と追諡されるのは更に40年ほど後、僖宗 (在位873-888) の時のことである (石井 [2013 : 85])。『禪源諸詮集都序』の執筆年について、鎌田 [1975 : 67-68] は833年以降としていたが、吉川 [1992 : 140] が指摘する通りそこには宗密の師澄観が838年の示寂に際し遺囑した言葉が含まれていることから、それ以降であることが分かる (伊吹 [2025 : 338])。

以上の三人のうち生前に皇帝より賜号されたのは径山道欽のみであり、馬祖道一は没後18年以上、石頭希遷は没後80年以上を経てからの追諡であった。天皇道悟の碑文撰述時に、生前に賜号を受け夙に名声を博していた径山道欽をその師と記すことは、その一門にとって誇らしいことであっただろう。なお馬祖道一の碑文にはその門徒として「道悟」の名を挙げている (C5.211)。それが天皇道悟であるとすれば、彼は馬祖のもとを訪れた際に頭角を現わしていたのであろう。

- ii. 中国史上最大規模の仏教弾圧である会昌の破仏が845年に断行された後、いち早く禅宗を復興したのが瀉山靈祐 (771-853) であった。彼は馬祖道一の法孫であり、破仏の20年以上前の元和年間 (806-820) 末に瀉山に住持した。破仏の際には還俗したが、その落ち着いた振る舞いにより名声を高め、破仏が終わると、たまたま同地の観察使 (長官) となっていた崇仏家の裴休 (791-864) に取立

てられ、再び瀉山に住持した。その時期は裴休が同地を離れる847年以前だったと考えられる。その門下には一千餘もの修行僧が雲集し、「天下、以て称首〈第一人者〉と為」したという（賈 [2010: 264, 355]、尾崎 [2007: 51, 53, 58]）。その頃、石頭希遷とその法嗣葉山惟儼（744-827）は「寢頓」（無名）であったが、「石頭希遷一葉山惟儼一雲巖曇晟一洞山」の法系を掲げる洞山良价が世に出たことにより、石頭の名声が高まった（『宋高僧伝』巻13: T50.786b）。洞山良价が世に出た年を買 [2010: 264] は851年、惟名 [2010: 72] は852年とする。葉山惟儼は元来、馬祖道一と最も関係の深い禅僧であったが（賈 [2010: 74-75]）、石頭にも参じたことがあったため、洞山良价はそれを石頭希遷の法嗣と看做した。その理由について賈 [2010: 264] は、当時勢力が盛んな瀉山靈祐や、勃興しつつある臨濟義玄（?-866/867）ら馬祖の「嫡系部隊」に対抗するため、洞山良价が石頭希遷を担ぎ出したのだと見ている。馬祖道一に並ぶ「二大士」として碑文が残された石頭希遷は、馬祖道一の直系に対抗するために好都合な旗印であっただろう。

- iii. 更にその後、「咸通」（860-874）の「初め」に徳山宣鑑（780-865）が世に出て一大教団を築き（『宋高僧伝』巻12: T50.778c）、「径山道欽一天皇道悟一龍潭崇信」の法系を「石頭希遷一天皇道悟一龍潭崇信」に改め、その法を嗣ぐことを宣言した（賈 [2010: 266]）。天皇道悟の碑文には彼が径山道欽に印可を受けた後、馬祖道一・石頭希遷を訪ね己が悟境を確かめたとあったが、徳山宣鑑は天皇道悟が最後に会った石頭希遷に嗣法したと看做したのである。これは正傍の価値観——径山道欽が属する牛頭宗は傍系に過ぎず、恵能に至る流れこそが正系だという見方——が当時既に定着しており、石頭希遷を介して恵能に法系を繋げようとしたのであろう。

なお青原行思が弘濟禅師と追諡されたのも、その法嗣の石頭希遷と同じ僖宗（在位873-888）の時であり、洞山や徳山らによる顕彰活動が功を奏した結果であると考えられている（賈 [2010: 266]）。

- (12) [82] 巖頭全歳の出身は福建（泉州南安県）であり、湖北（鄂州唐寧）に住した（S335）。
- (13) 『祖堂集』が録する巖頭全歳の法嗣 [110-113] 4名のうち、[110] 玄泉彦の出身地は不明で、河南（懷州）に住し（K17.28/469）、[111] 師彦は福建（閩越）の出身で浙江（台州）に住し（K17.27/468）、[112] 慧宗は福建（福州長溪）の出身で江西（吉州）に住し（S448）、[113]

- 道閑^{どうかん}は福建（長溪）の出身で福建（福州）に住している（S449）。うち
 [110] 玄泉彦の所住地と [111] 師彦の出身地・所住地の記録は『祖堂
 集』には見えず、『景德伝燈録』に依る。
- (14) 『祖堂集』が録する巖頭全藏の法孫 [152-155] 4名のうち、[152] 誨^{かい}機^き
 は河北（清河）の出身で湖北（鄂州）に住し（S568）、[153] 隱微^{いんび}は江
 西（吉州新淦）の出身で江南（金陵）に住し（S570）、[154] 從盛^{じゅうせい}は福
 建（福州閩）の出身で江西（高安）に住し（S572）、[155] 惟曠^{いこう}は福建
 （福州閩清）の出身で江西（吉州）に住した（S574）。
- (15) 『祖堂集』が録する雪峰義存の法嗣 [114-134] 21名のうち、[114] 師備^{しび}
 は福建（福州閩）の出身で福建（福州）に住し（S454）、[115] 皎然^{こうねん}は
 福建（福州）の出身で福建（福州）に住し（S461）、[116] 智孚^{ちふ}は福建
 （福州）の出身で江西（信州）に住し（S464）、[117] 玄通^{げんつう}は福建（福
 州福唐）の出身で福建（大普）に住し（S465）、[118] 道慙^{どうふ}は浙江（溫
 州）の出身で浙江（越州）に住し（S466）、[119] 令參^{れいさん}は浙江（湖州）
 の出身で浙江（明州）に住し（S477）、[120] 懷岳^{えがく}は福建（泉州仙遊）
 の出身で福建（漳浦）に住し（S479）、[121] 師郁^{しよく}は福建（泉州莆田）
 の出身で浙江（西興）に住し（S480）、[122] 神晏^{しんあん}は河南（梁国）の出
 身で福建（福州）に住し（S481）、[123] 紹卿^{じょうきやう}は福建（泉州莆田）の出
 身で福建（漳州）に住し（S484）、[124] 弘韜^{ぐとう}は福建（泉州仙遊）の出
 身で福建（福州）に住し（S485）、[125] 慧稜^{えりやう}は浙江（杭州海塩）の出
 身で福建（福州）に住し（S489）、[126] 從展^{じゅうてん}は福建（福州福唐）の出
 身で福建（漳州）に住し（S499）、[127] 偃禪^{えんぜん}は江蘇（蘇州中吳府嘉
 興）の出身で広東（韶州）に住し（S512）、[128] 靈照^{れいしょう}は海東（東国）
 の出身で浙江（浙江）に住し（S519）、[129] 從弁^{じゅうえん}は福建（福州閩）の
 出身で福建（福州）に住し（S525）、[130] 玄訥^{げんとつ}は海東（東国）の出身
 で福建（泉州）に住し（S526）、[131] 延宗^{えんしゆう}は福建（泉州莆田）の出身
 で江西（吉州）に住し（S527）、[132] 惟勁^{いけい}は福建（福州永泰）の出身
 で湖南（南岳）に住し（S528）、[133] 鑑真^{かんじん}は出身地不明で浙江（越
 山）に住し（S531）、[134] 道溥^{どうふ}は福建（福唐）の出身で福建（泉州）
 に住した（S533）。
- (16) 『祖堂集』が録する雪峰義存の法孫 [156-162] 7名のうち、[156] 慧^え
 救^{きゆう}は福建（泉州莆田）の出身で福建（福州）に住し（S575）、[157] 毗^び
 禪^{ぜん}は出身地は不明で福建（福州）に住し（S578）、[158] 道匡^{どうこう}は広東
 （漢国朝州）の出身で福建（泉州）に住し（S581）、[159] 光雲^{こううん}は福建
 （泉州莆田）の出身で福建（福州）に住し（S589）、[160] 如新^{にょしん}は福建

『祖堂集』の構造

- (福州福唐)の出身で安徽(舒州)に住し(S598)、[161]省儉^{しょうけん}は福建(泉州仙遊)の出身で福建(泉州)に住し(S599)、[162]行崇^{ぎょうそう}は福建(福州長溪)の出身で安徽(舒州三祖塔)に住した(S607)。
- (17) 『祖堂集』には「洞山と密師伯との来たるを見る」とあり(S715)、「密師伯」とは洞山の弟子から見た「師伯」(法系上の伯父、すなわち師の兄弟子)である神山僧密を指す。小川 [2011: 123]。
- (18) 『祖堂集』の雪峰義存の章には、彼と問答した僧が雲居道膺^{うんこ}に参じ、その時のやりとりを雪峰に伝え、雪峰が「者の老漢め。老僧、臂長からば、則ち便ち打つこと二十棒せんに」云々と言ったことが記されている(S350)。また投子大同の章には雲居道膺^{うんこ}が、「南に雪峰有り、北に趙州有り」と述べ、優れた禅匠として名高い趙州全諗^{じょうしゅうぜんしん}(従諗)に匹敵する人物として雪峰義存を挙げたと記されている(S284)。このほか、洞山良价の章には、その問いに答えられなかった雪峰義存に代わり、雲居道膺^{うんこ}が示した一句が記されている(S304)。
- (19) [49] 靖居(青原)行思の章には、「曹溪^{そうぎ}〈=33祖惠能〉の密旨を伝えて自ら、便ち廬陵に復り、群生を化度」っていた彼と、「曹溪」からその下を尋ねた[50] 荷沢神会の以下のような問答が記されている。「師、神会に問う、「汝^{なん}じ何方^{いずく}従りか来たる」。対えて曰く、「曹溪^{そうぎ}従り来たる」。師曰く、「何物^{なに}をか将得^{もちえ}て来たる」。会、遂^{かく}て身を震わし示す。師曰く、「猶^なお瓦礫^{がりやく}を持てる在^ぞ」。会曰く、「和尚^{おそう}の此間^{ここ}、真金^{まがね}の人に与^あうる有るに莫^{あら}ず不^や」。師曰く、「設^た使い有るも、汝^{なん}に与^あえて什摩^{いずく}処^{ところ}に向いてか著^おかん」(S156-157)。書き下しにあたり小川 [2011: 102-103] を参照した。なお小川はこの問答を、[57] 石頭希遷と [64] 潮州大顛^{ちようしゅうだいいてん}の問答と併せて解釈するが、ここでは単純に、神会が行思にやり込められた話と解する。
- (20) 『祖堂集』は趙州の法諱を「全諗」とするが、『宋高僧伝』など後の資料は「従諗」とする(S784)。
- (21) 『祖堂集』の[220] 趙州全諗(従諗)の章には、(1) 趙州の言葉について雪峰に尋ねた僧が、雪峰に蹴り倒された話、(2) 趙州のもとにいた僧が雪峰を訪れた際に、事前に趙州から教わっていたように問答したところ、「君子は遠く離れていてもその風格は同じ」と雪峰が認めた話のふたつが収録されている。詳細は以下の通り。(1) 「人有^{ひんじゆ}り挙^いして雪峰^{ふみたお}に問う、「趙州の無資主^{むしゆしゆ}の話、作摩生^{そま}生^{せい}にか道^{みち}わん」。雪峰便^ふち踏倒^{ふみたお}す」(S787)。(2) 「問う、「学^が人^{にん}し南方^{みなみ}に去^いくに、忽^い然^かと雪峰^{ふみたお}、趙州^{ちようしゅう}の意^いを問^あわば、作摩生^{そま}生^{せい}にか祇^あ対^{たい}えん」。師云く、「冬^{ふゆ}に遇^あわば則^{すなわ}ち寒^ふく、夏^{なつ}に遇

わば則ち熱し」。進みて曰く、「究竟^{つまるごと}趙州^{ちゅうしゅう}の意旨^{いしん}、如何^{いかん}」。師云く、「親^{みずか}ら趙州^{ちゅうしゅう}従り来たり、語を伝うる人に不是^{あらず}ず」。其の僧、雪峰^{せつふく}に到り、果たして問う所の如し。其の僧、一一、上の如く挙げ對う。雪峰曰く、「君子千里同風なり」(S789)。入矢 [1982: 31-33] 参照。

- (22) 『祖堂集』の[83]雪峰義存の章には、雪峰の「天地まるごと一つの眼だ。お前らはどこにクソを垂れるつもりか」という言葉について、趙州がそれを鋭く批判したこと、さらこの言葉について雪峰の法嗣 [119] 翠巖令参が洞山良价の法嗣 [91] 疎山匡仁と問答したことが記されている。詳細は以下の通り。「僧、蘇州西禪 <[220] 趙州全諡の師兄弟>に問う、「三乘十二分教は則ち問わず、祖師の西より来たる^{かなめ}的^た的^{うべな}の意、只だ一言せんことを請う」。西禪、^{ぼつす}^た^い^ず^く 弘子を豎起つるに、其の僧、肯わず。後ち雪峰に到るに、師問う、「^{なん}^は^{うべな} 什摩^や処よりか来たる」。對えて云く、「^{なん}^は^{うべな} 西禪より来たる」。師云く、「^{なん}^は^{うべな} 什摩^やの^い^ず^く 仏法の因縁か有る」。僧、前話を挙ぐ。師云く、「^い^{かん}^{てい} 你^{なん}じ還た^う肯^いず^くや也無」。對えて云く、「^い^{かん} 作摩生か肯わん」。師云く、「^い^{かん} 作摩生か肯わざる底の道理を説く」。對えて云く、「^い^{かん} 什摩生なる問いぞや。師、境を^{もつ}持て人に示せり」。師云く、「是れ^{なん}^じ 你^{なん}の西禪^い従り^か与^い摩^かく来たりて這裏^{こゝ}に到るに、多少^{すく}の林木を過却^するも總是て境なり。你、^{なん} 什摩^やに因りてか肯わざることをせずして、^た 只だ弘子のみを肯わざるを得るや」。僧、對うる無し。此に因りて師云く、「^{しん}^{けん}^{こん} 乾^{なん}坤^じは是れ一個の眼なり。是れ你ら諸人、^い^ず^く 什摩^や処^おに向いてか不淨^くを放つ。慶 <[125] 長慶慧稜か>對えて云く、「和尚、何ぞ^た^び 重重^あ相^さい欺^あくを得んや」。人有り此の語を持つて趙州^{ちゅうしゅう}に^と参^あぐ。趙州、云く、「上座、若し^も 闍に入らば、上座に一個の^く^わ 鉢^こ子を寄去けん」。翠岳 <雪峰の法嗣 [119] 令参>、師の語を持つて疎山 <洞山良价の法嗣 [91] 匡仁>に^と参^あぐ。……」(S352-353、禪文化研究所唐代語録研究班 [2011: 280])。解釈については入矢 [1982: 32] を参照。

- (23) 『祖堂集』の[75]投子大同の章に、雲居道膺門下の僧が投子に参じた際に「ここと比べて雲居のところはどうか」と尋ねられ答えられなかった。そこで師の雲居に尋ねたところ、雲居は「南には雪峰、北には趙州」と言ったのだという。この言葉には二つの意味が込められていると推測する。第一に、雲居がいた雲居山の南北にはそれぞれ雪峰・趙州があるという位置関係を「ありのまま」に答えることで、いまこのように現前している真理を示そうとした。第二に、南北に並び立つ雪峰・趙州の両雄に伍しているという自負を示した。この推測の当否に拘わらず、雪峰の法孫の門下にいた編者静・筠と、彼らが属する徳山一門にとって、

雪峰のライバルである雲居が、同じくライバルであった趙州に比肩する禪匠として雪峰の名を挙げたことは、大いに面目を施すものであっただろうし、だからこその話を『祖堂集』に収めたのであろう。『祖堂集』の記載は以下の通り。「師〈＝投子大同〉、僧に問う、「什摩処従りか来たる」。对えて曰く、「雲居より来たる」。師曰く、「此間地と何似ぞ」。僧、对うる無し。却帰り雲居に拳似す。雲居云く、「南に雪峰有り、北に趙州有り」」(S284)。

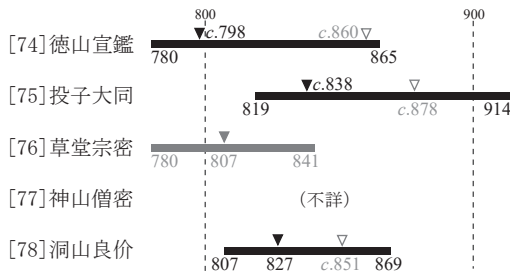
- (24) 法系図に配した通り、[57] 石頭希遷、[58] 耽源^{たんげんおうしん}応真、[163] 馬祖道一と数え、馬祖道一の位次は第3となる。なお[57] 石頭希遷と[58] 耽源^{たんげんおうしん}応真の間に細字で示した磁州^{じしゅう}如は、『祖堂集』において位次が明示されていないので、カウントしない。
- (25) 相承が明示されない[191] 陳慧忠を加えるか否かにより、[195] 南泉普願の位次は39位か38位となる。[191] 陳慧忠については注(8)参照。
- (26) 『祖堂集』は952年の成書当初、全1巻であったが、ほどなく10巻に増広され、その後朝鮮に伝わり、20巻に再編されて1245年に上梓された。現行の『祖堂集』はこの1245年に彫刻されたものであり、それ以外の版は一切現存していない(衣川[2003:127][2010:88-89][2013:200-198][2022:6,74,167-168])。編者の静・筠は、952年の成書時に省燈が寄せた序文に見えるのみで(S序1)、彼らが10巻本への増広にどの程度関わったのか、中国での増広と朝鮮での再編においてどのような補訂改変が為されたのかは分からない。拙論の本文において朝鮮での増補が為される前のもとの構成と言ったのは、中国で増広された10巻本の姿を指す。本文で論じた通り、その構成は静・筠が所属する徳山一門を上位に拠える形となっていることから、仮に952年の成書後に彼らの手を離れ、増広が別人によって為されたとしても、それは同様に徳山一門に帰属意識を有する者だったと考えられる。

なお増広が為された時期と場所については、いまだ見解の一致を見ていない。衣川[2022:93-95]は1巻本が編まれた場所、すなわち泉州招慶寺において増広が為され、その作業は960年頃に完了したと推測する。それに対しJia[2023]は、現行本とほぼ同じ内容が952年に同寺(泉州招慶寺)で完成しており、1巻・10巻・20巻の相違は全体の分け方の違いに過ぎず、内容に増減が生じたわけではないとする。Van Cutsem[2023:133-163]はJiaの議論の一部に疑念を呈しつつも、現行本とほぼ同じ内容が952年に完成していたという同様の可能性を再考すべきと論じる。

拙論は衣川説の大枠——952年に1巻本が成立し、その後ほとんど現行本とほぼ同じ内容の10巻本に増広され、朝鮮に伝わった後に20巻に再編・上梓されたという見方——に基づいている。その最大の理由は、Jia らが言うように単なる分巻の違いに過ぎなかったのであれば、のち朝鮮で序文を撰する際に「已上の序文並びに祖堂集一巻、先に此土〈＝朝鮮〉に行われ、爾後ち十卷齊な到れり」というように（S序1）、わざわざ「一巻」「十巻」と書き分けなかっただろうと考えるからである。だが仮に Jia らの説——952年には既に現行本とほぼ同じ内容が完成しており、もと分巻なしの1巻であったのが、中国では10巻、朝鮮では20巻に再編されたという見方——が正しいとしても、拙論の主張——朝鮮で上梓された『祖堂集』の現在の姿は徳山一門により編纂された当初（Jia らの説では952年に完成した分巻なしの1巻本、衣川説では増広を経て960年頃に成った10巻本）の構成を留めているという理解——に変化は生じない。

- (27) 拙論では位次について、重要な禅僧ほど先に配される傾向があると考ええるが、あるいは (a) 出生・(b) 受具足戒・(c) 出世（住持）・(d) 示寂の年に基づくという見方もあるかもしれない。もちろん燈史の編纂にあたりそれを考慮した可能性が皆無とはいえないが、少なくとも『祖堂集』青原下第4世の最初の5名——[74] 徳山宣鑑、[75] 投子大同、[76] 草堂宗密、[77] 神山僧密、[78] 洞山良价——については下の表に示した通りそうでないかと断言できる。

この表は上述5名の (a)～(d) の年を比較するために作成したものである。表では『祖堂集』が挙げる順に上記5名を上から下に配し、その生涯の長さを黒の太線で示し、その左端と右端にそれぞれ (a) 生年と (d) 没年を示した。加えて、▼の記号により (b) 受具足戒の年を、▽の記号により (c) 出世の年を示した。うち黒色は『祖堂集』に明記



『祖堂集』の構造

されるもの、灰色は『祖堂集』には記録が無く、他から情報を補ったものである（詳細は後述）。なお具足戒とは、正式に出家する際に受ける戒律（中国で行われた『四分律』によれば男性は250戒、女性は348戒）であり、それを受けてから法臘（出家者としての歳）を数える。次の段の引用文中に見える「僧夏」「僧臘」が法臘であり、出家者教団内の序列を決める重要なものであった。

5名の各年とその根拠を列記すると以下の通りである。

[74] 徳山宣鑑は780年に生まれ、798年頃に具足戒を受け、865年に没した。このことは『祖堂集』に「咸通六年乙酉歳〈865〉十二月三日……奄然順化。春秋八十四，僧夏六十五」と記される（S276）。出世は『宋高僧伝』に「咸通」（860-874）の「初め」とある（T50.778c）。

[75] 投子大同は819年に生まれ、838年頃に具足戒を受け、914年に没した。このことは『祖堂集』に「於甲戌歳〈914〉四月六日跏趺端坐，俄然順化。春秋九十六，僧夏七十六矣」と記される（S286）。出世の年は『景德伝燈録』に「師居投子山三十餘載」と記される「三十餘」（31-39）から逆算して874-882のいずれかとなる。表ではその中央の値である878年に記号▽を附した。

[76] 草堂宗密は780年に生まれ、807年に具足戒を受け、841年に没した。このことは『宋高僧伝』に「元和二年〈807〉……此年進具于拯律師。……会昌元年〈841〉正月六日坐滅於興福塔院。……俗齡六十二，僧臘三十四」と記される（T50.741c-742a）。

[77] 神山僧密は不詳。

[78] 洞山良价は807年に生まれ、827年頃に具足戒を受け、869年に没した。このことは『祖堂集』に「師自咸通十年己丑歳〈869〉三月一日剃髮被衣，今擊鍾，儼然而往，大衆號慟。師復覺……至八日使開浴。浴訖，端坐長往。春秋六十二，僧夏四十一」と記される（S312）。出世は851年頃（前注(11) ii）。

表に記した通り、(a) 出生・(b) 受具足戒・(c) 出世・(d) 示寂のいずれの基準でも『祖堂集』の位次にはならない。(a) 出生では、[74] 徳山宣鑑、[76] 草堂宗密（徳山と同年）、[78] 洞山良价、[75] 投子大同の順となる。(b) 受具足戒では [74] 徳山宣鑑、[76] 草堂宗密、[78] 洞山良价、[75] 投子大同の順となる。(c) 出世では [76] 草堂宗密、[78] 洞山良价、[74] 徳山宣鑑、[75] 投子大同の順となる。

(d) 示寂では [76] 草堂宗密、[74] 徳山宣鑑、[78] 洞山良价、[75] 投子大同の順となる。([77] 神山僧密はいずれも不詳。[76] 草堂宗密の出世(住持)の年も不詳だが、余他の者の出世はみな宗密の示寂後なので、前後関係は確定できる。ただし宗密が著述を行った場所と時期は比較的詳しく知られている。鎌田 [1975 : 62-68] 参照)。

このことから『祖堂集』の位次は、本論で示した以下のような操作の結果であると考える。(1) 編者が属する徳山一門の祖 [74] 徳山宣鑑を首位に据える。(2) その法嗣の雪峰義存と関係の深い [75] 投子大同と [78] 洞山良价をその下に配する。うち洞山が下位に配されるのは、彼に対する徳山一門の評価が低かったことによる。(3) 投子と洞山の懸隔を強調するため、系譜の異なる [76] 草堂宗密をその間に挿入する。(4) 洞山の上位にその師兄の [77] 神山僧密を配する。

なお徳山下第1世において [83] 雪峰義存は師兄の [82] 巖頭全蔵の下位に配されるが、少なくとも以下の3点において、『祖堂集』とその編者にとって巖頭以上に重要な人物であった。第一、門下1700名という当時最大の教団を築いた(拙論 [2025a : 37])。第二、収録される法嗣・法孫の数は巖頭より多い。法嗣・法孫の数は巖頭が [110-113] 4名・[152-155] 4名であるのに対し、雪峰は [114-134] 21名・[156-162] 7名となっている。第三、編者の静・筠は雪峰の法孫 [161] 省僊の門下におり、彼らにとって雪峰のほうがより近い人物であった。ただし静・筠について知られることは、編纂当時省僊の門下にいたということだけで、その法を嗣いだかどうかは不明である(拙論 [2025a : 36] [2025b : 282])。

【略号一覧】

- C : 「禅の語録」シリーズ、筑摩書房、1969-1981年刊行、2016年再行。a/b と表記。a は巻、b は頁。
- K : 『景德伝燈録』、a/b と表記。a は中国国家図書館のウェブサイト(中華古籍資料庫・趙城金藏、http://read.nlc.cn/allSearch/searchDetail?searchType=10021&showType=1&indexName=data_892&fid=ZHCH1078、2025年6月30日閲覧)の巻・コマ数。コマ数にnと記す場合は、その部分が現存しないことを示す。b は馮 [2018] の頁数を記す。
- S : 『祖堂集』、孫・衣川・西口 [2007] の頁数を記す。
- T : 『大正新脩大蔵経』、大蔵出版、1924-34年刊行、1960-79年再刊。

『祖堂集』の構造

【参考文献】

Anderl, Christoph

- [2024] *Studies in the Language of Zu-tang ji*, Ph.D. dissertation, University of Oslo, Oslo.

Jia, Jinhua (賈晋華)

- [2023] The Dating of the *Zutang ji* and the Shaping of Classical Chan Literature and History, *The Eastern Buddhist* 3 (1), pp.1–25.

Jorgensen, John

- [2005] *Inventing Hui-neng, the Sixth Patriarch: Hagiography and Biography in Early Ch'an*, Brill, Leiden.

Van Cutsem, Laurent

- [2023] *The Zutang ji 祖堂集: Aspects of Textual History, Genealogy, and Intertextuality*, Ph.D. dissertation, Universiteit Gent, Ghent.

石井修道

- [2013] 『石頭：自己完結を拒否しつづけた禪者』唐代の禪僧3、臨川書店、京都。

伊吹敦

- [2025] 『荷沢神会研究：神会の生涯・著作・思想とその史的意義』、法藏館、京都。

入矢義高

- [1982] 「雪峰と玄沙（上）」、『禪文化』106、頁21–46。のち同 [1986：23–54] [2012：23–55] に再録。
[1986] 『自己と超越』、岩波書店、東京。
[2012] 『増補 自己と超越：禪・人・ことば』、岩波書店、東京。

小川隆

- [2011] 『語録の思想史：中国禪の研究』、岩波書店、東京。
[2016] 『「禪の語録」導読 禪の語録20』、筑摩書房、東京。のち同 [2020] として再刊。
[2020] 『中国禪宗史：「禪の語録」導読』、筑摩書房、東京。

尾崎正善

- [2007] 『滄山：滄仰の教えとは何か』唐代の禪僧5、臨川書店、京都。

賈晋華

- [2010] 『古典禪研究：中唐至五代禪宗発展新探』、Oxford University Press、Hong Kong。修訂版に同 [2013]、再修訂版の日本語訳に [2017]。
[2013] 『古典禪研究：中唐至五代禪宗発展新探（修訂本）』、上海人民出版社、

上海。

- [2017]『古典禪研究：中唐より五代に至る禪宗の発展についての研究』
(齋藤智寛監訳、村田みお訳)、汲古書院、東京。

鎌田茂雄

- [2013]『宗密教学の思想史的研究』、東京大学出版会、東京。

衣川賢次

- [2003]「祖堂集の校理」、『東洋文化』83、頁127-152。のち同[2022：39-63]に補訂再録。
[2010]「泉州千仏新著諸祖師頌と祖堂集：附 省僊（文僊）禪師をめぐる泉州の地理」、『禅学研究』88、頁75-113。のち同[2022：64-88]に補訂再録。
[2013]「『祖堂集』の基礎方言」、『東洋文化研究所紀要』164、頁139-204。のち同[2022：147-193]に補訂再録。
[2022]『『祖堂集』の文献学的研究』、京都大学博士論文、京都。

齋藤智寛

- [2020]『中国禅宗史書の研究』、臨川書店、京都。

椎名宏雄

- [1979]「『祖堂集』の編成」、『宗学研究』21、頁66-72。のち同[2023：256-265]に補訂再録。
[1980]「『宝林伝』巻九巻十の逸文」、『宗学研究』22、頁191-198。のち同[2023：205-125]に補訂再録。
[2010]『洞山：臨済と並ぶ唐末の禅匠』唐代の禅僧7、臨川書店、京都。
[2023]『宋元版禅籍の文献史的研究 第一巻』、臨川書店、京都。

鈴木哲雄

- [2009]『雪峰：祖師禅を实践した教育者』唐代の禅僧9、臨川書店、京都。

禅文化研究所唐代語録研究班

- [2011]「『祖堂集』巻七雪峰和尚章訳注（上）」、『禅文化研究所紀要』31、頁199-286。

孫昌武・衣川賢次・西口芳男

- [2007]『祖堂集』、中華書局、北京。

張美蘭

- [2009]『祖堂集校注』、商務印書館、北京。

土屋太祐

- [2024]『法眼：唐代禅宗の変容と終焉』唐代の禅僧12、臨川書店、京都。

馮国棟

『祖堂集』の構造

[2018]『景德伝燈録』、中州古籍出版社、鄭州。

柳幹康

[2025a]「『景德伝燈録』の禅宗史観：『祖堂集』との比較分析を通じて」、
『花園大学国際禅学研究所論叢』20、頁31-68。

[2025b]「禅宗史観の確立：五燈から『五燈会元』へ」、『東洋文化研究所紀要』188、頁286-231。

柳田聖山

[1964]「祖堂集の本文研究（一）」、『禅学研究』54、頁11-87。

[1967]『初期禅宗史書の研究』、法藏館、京都。

[1982]「『祖堂集』解題」、『祖堂集索引 下冊』、京都大学人文科学研究所、
京都、頁1567-1606。

[1984]『純禅の時代：祖堂集ものがたり』、禅文化研究所、京都。

[1985]『続・純禅の時代：祖堂集ものがたり』、禅文化研究所、京都。

[1990]『祖堂集』大乘仏典中国・日本篇13、中央公論社、東京。

楊曾文

[1999]『唐五代禅宗史』、中国社会科学出版社、北京。

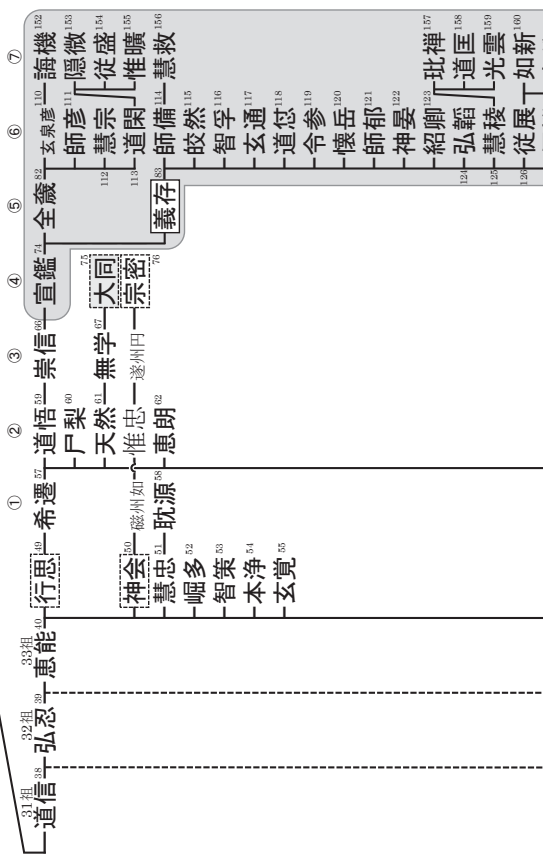
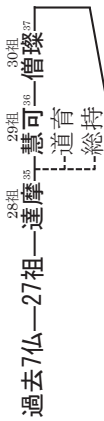
吉川忠夫

[1992]「裴休伝：唐代の一士大夫と仏教」、『東方学報』64、頁115-277。の
ち同 [2020：463-650] に補訂再録。

[2020]『六朝隋唐文史哲論集Ⅱ：宗教の諸相』、法藏館、京都。

梁天錫

[2000]「《祖堂集》通考：宋代麗僧補編仏教禅宗早期燈録研究之一」、『能仁
学報』7、頁27-76。



図：『祖堂集』全体の法系図（1/4）

省登 行崇

偃禪 靈照 從弇 玄訥 延宗 性勁 鑑真 道溥

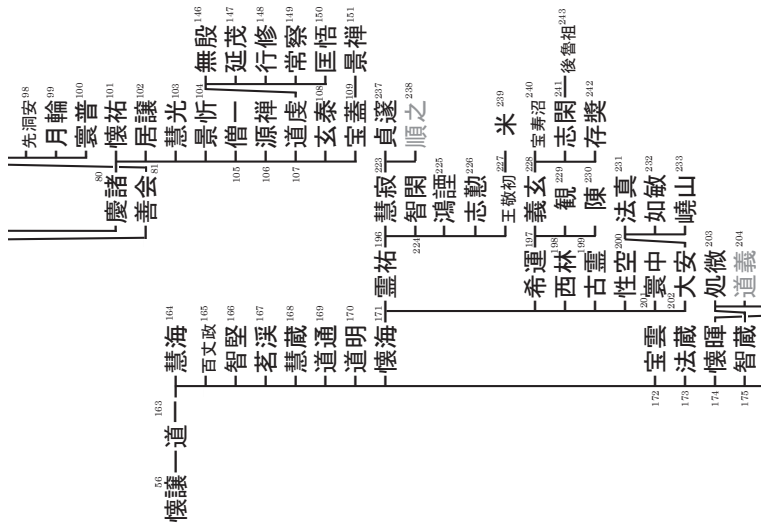
弘日 南臺 慧遇 從志 真禪 匡慧 弘通 紫陵 長興

休靜 本仁 師虔 匡仁 居遁 幽棲 令超 元安 可文 道遥

性儼 曇晟 良价 道膺 文遂 道全 本寂 體靜 本仁 師虔 匡仁 居遁 幽棲 令超 元安 可文 道遥

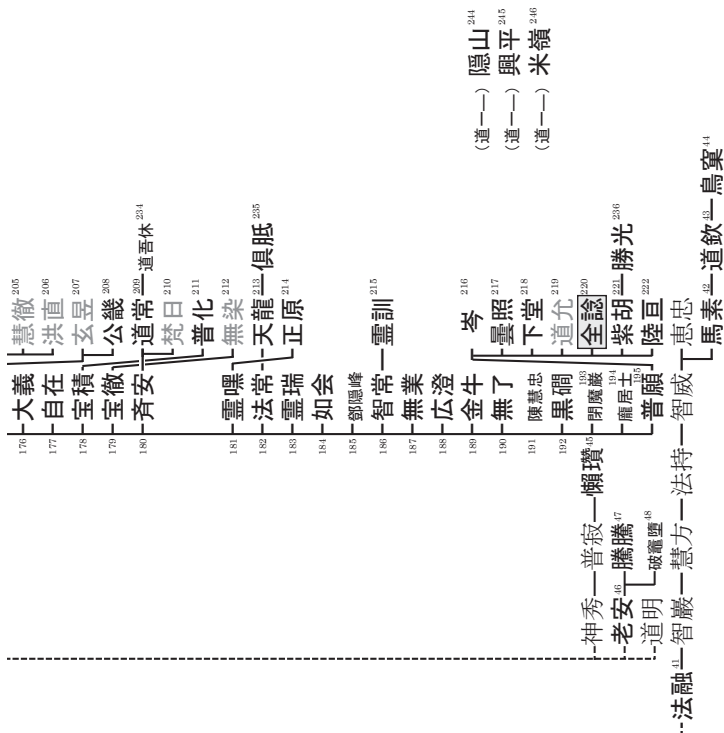
德誠 棹樹 智 大顓 義忠 長髭

 $(2/4)$



図：『祖堂集』全体の法系図 (3/4)

『祖堂集』の構造



図：『祖堂集』全体の法系図 (4/4)